

持、貯蔵性増大、災害抵抗性の増大などに関連する生育調節物質・剤の開発利用が促進される段階に達し、この方面ではバイオテクノロジーの手法の利用も考えられるに至っている。したがって、これまでの集約的栽培管理による作物の安全多収技術に代わる生育調節物質・剤利用による農家に魅力のある省力安定多収技術の開発が期待される。

以上のように、今後解決を期待される事項のうち、本協会が関与する領域のものが多く、これを適切かつ迅速に進めることは、私の微力で

は困難ではないかと思うが、会長をおひき受けしたからには、これまで大変な努力で協会を今日の立派な協会にまで育てあげられた諸先輩の業績を顧み、これを基盤として、協会の役職員各位のご指導、ご協力を受け、誠心誠意微力を傾け、目標に近づけることを心がけたいと思う。

ついては、元会長はもちろん、関係業界、国公立試験研究機関、ことに農林水産省の行政当局、農林水産技術会議各位の格別なご指導ご鞭達を衷心よりお願いする次第である。

会 長 退 任 挨拶

前 財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 千野 知長

このたび会長を退任することになりました。

昭和55年12月、植物調節剤のわが国における利用普及の30周年および植調会館の竣工を記念する式典が挙行されて間もない理事会において、会長に選任されましてから3年間の務めでありましたが、素養の浅い者ゆえ果してその任に耐えることができるかどうかと自ら危ぶむ思いを禁ずることができませんでした。幸いに戸荻前会長がしっかりした軌道を敷いておいて下さったので、私はその軌道を坦々として辿りつづければよいような務めでありました。

時の推移により、税制改正に伴う実費弁償方式への移行、年々増加の一途を辿る農薬製造業界からの試験委託需要と国公立試験研究機関の試験受託能力が限界にきている事情に対応するため、植調研究所の研究機関の拡充および協会が自ら行なう現地試験の充実のための支部新

設等組織の整備など新たに対処しなければならぬ問題もでてはきましたが、基本的にはすでに確乎として築かれていた、関係機関および農薬製造業界が本協会に寄せるゆるぎない信頼感に支えられ、その確立されていた事業推進方針に沿って事業を進めてゆけば自ら成果が約束されるという、まことに恵まれた立場で務めをつづけていくことができました。

このたび大過なく任を務め終えることができましたのも一重に農林水産省関係部局および役員はじめ諸先輩の懇切なるご指導、また専門委員をはじめ国公立試験研究機関の多数の研究者ならびに農薬製造業各社の温いご支援、さらに内には吉沢専務、吉田常務ならびに小沢事務局長はじめ職員一同の一体となつてのご協力のお陰であり、まことに有難く深く感謝申し上げます。

ブラジル植調の拡充整備問題は、残されたただ一つの気がかりの課題と考えておりますが、これは当国の財政経済事情の落着きを待って対処するはか当の方策を見出すことが困難な問題と考えます。引続きその国情のなりゆきを見守っていったい欲しいと存じます。

今後は、私の身近な果樹業界において、本協

会の事業推進に対し、陰ながら応援して参るとともに農薬製造各社の新しく登録される薬剤の円滑な普及に微力ながらお役に立って参りたいと考えております。

ここに在任中、ご指導、ご支援、ご協力を賜りました、多数の関係者の方々に衷心よりお礼申し上げます退任のご挨拶といたします。

パラコート抵抗性雑草について

農林水産省農業研究センター作物第一部芋類栽培研究室長 渡辺 泰

1. はじめに

農薬の連用に伴う病害虫の抵抗性発現の問題は広く知られており、薬剤の開発や施用に際しての一般的留意事項となっている。雑草についても、文献によるとイギリスの研究者達は除草剤の実用化当初から抵抗性発現の不可避性を指摘し、その回避策を論じていたが、雑草の除草剤抵抗性発現の問題はあまり関心が払われていなかった。

しかし、アメリカのワシントン州におけるシマジンとアトラジンに対する抵抗性ノボロギクの発現例が昭和45年に報告される¹⁾に及び、研究者の注目をひくこととなった。その後、トリアジン系除草剤に対する抵抗性雑草の発現が各国において相ついで確認され、その数は昭和56年11月現在、18属30種に達し、アメリカの23州とカナダの4つの州およびヨーロッパの7か国で発現しているという²⁾。昭和57年にアメリカの John Wiley & Sons 社から出版された Le Baron と Gressel 編の “Herbicide Resistance in Plants” をみると、欧米

におけるこの分野の研究は著しく発展していることがわかる。

幸い、わが国ではトリアジン抵抗性雑草の発現例が知られていないこともあって、この問題についての関心は必ずしも高くはなかった。しかし、最近パラコートに対する抵抗性雑草として埼玉県におけるハルジョオン³⁾、大阪府におけるヒメムカシヨモギ⁴⁾の例が発見されてから、わが国でも一般の関心をよぶようになった。現在、パラコート抵抗性雑草の発現例は外国でも二、三知られている。

筆者らは、わが国で最初の除草剤抵抗性発現例として、パラコート抵抗性ハルジョオンを発見する機会に遭遇したので、以下、その経過を中心にパラコート抵抗性雑草について紹介したい。

2. パラコート抵抗性雑草

1) ハルジョオン

(キク科 ムカシヨモギ属 学名; *Erigeron philadelphicus* L.)